文献センター通信

第24号
2013年9月1日
一部100円

主な内容

大杉野枝宗一没後90周年集会案内 …1
書籍・イベント案内 ……2
モントリオールAブックフェア…4
新宿図書室主要文献目録（2）……5
和田久太郎のはえあるときⅡ ……7

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一没後90周年記念集会

九月、十一月、大杉栄に縁ある各地で講演会など開催

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一の没後90周年となる本年ですが、大杉栄に縁がある全国各地で記念集会が予定されていることから、当編集部において、各地集会の開催概要をまとめました。

お近くの方はもちろん、90周年という節目の本年ですので、遠方の方も、ぜひこの機会に墓参と合わせて、足を運んでみてはいかがでしょうか。

【新潟県新発田市】

「没後90年（1885～1923.9.16）大杉栄メモリアル2013～映像と言葉で日本近現代史をふりかえる～」

○第一部　ドキュメンタリー映画「100年の谺（こだま）―大逆事件は生きている」（脚本＝藤原智子　演出＝田中啓（90分／2012年））

○第二部　講演「大杉栄と辻潤～伊藤野枝の眼で読み解く～」（60分）講師＝森まゆみ氏（作家）

◇とき＝2013年9月16日（月・祝）13時～16時

◇ところ＝新発田市生涯学習センター講堂

◇主催＝大杉栄の会

◇後援＝新発田市教育委員会

◇チケット＝前売1000円、当日1500円（18歳以下、障がい者等の付き添いの方無料）

◇問い合わせ＝斎藤（0254-22-3372）

「プレイベント　百弐拾年前の新発田を読む　～大杉栄の自叙伝」をテキストに～

◇とき＝2013年9月15日（日）14時～16時

◇ところ＝西園町3丁目公会堂（自衛隊正面前）

◇会費＝500円

◇講師＝交渉中

※なお、当日会場で大杉栄著「自叙伝」（土曜社、1000円）を販売します。終了後は大杉栄ゆかりの地を歩きます。

【愛知県名古屋市】

「第39回　橘宗一少年墓前祭／講演会」

◇期日＝9月15日（日）

◇墓前祭＝午後1時～　於＝日泰寺境内　墓碑前

※自由ケ丘バス停より西へ約300M。墓前祭へは直接墓碑へ行くか、「日泰寺」境内入口付近の旧茶店跡へ集合してください。マイクロバスで12時30分に出発／移動します。

※「覚王山日泰寺」へはJR名古屋駅から地下鉄東山線「覚王山日泰寺

(052-571-6131)　JR名古屋駅 東口から5分

◇連絡先＝橘宗一少年墓碑保存会(052-842-7641　アルス内)

※墓碑保存会への維持会費ご協力のお願い（年一口3000円）

郵便振替口座　00870-1-120387

橘宗一少年墓碑保存会

【静岡県静岡市】

「墓前祭／記念講演会」

とき＝9月16日（月・祝）　墓前祭＝11時30分　記念講演会＝2時

ところ＝墓前祭＝沓谷霊園、記念講演会＝静岡県総合社会福祉会館シズウエル（沓谷霊園に隣接＝TEL 054-254-5248）

講演者＝大杉豊氏

主催＝静岡近代史研究会(054-266-5376＝水曜文庫内)

【東京都新宿区】

「大杉栄・伊藤野枝没後90年集会」

日時＝2013年11月16日（土）開場＝17時50分～開演＝18時20分（予定）

場所＝四ツ谷区民ホール（新宿区内藤町87　※丸ノ内線・新宿御苑前下車、徒歩5分）

講演＝太田昌国氏「大杉栄とアナキズム（仮）」

映画上映『シュトルム・ウント・ドランクッ』（山田勇男監督・中村栄美子主演）

※本邦初公開、大正無政府主義者たちの青春群像時代劇！特別先行上映

会費＝1500円

主催＝「大杉栄・伊藤野枝没後90年集会」実行委員会（FAX 03-3352-6916　Email＝2013n16@gmail.com）

★10月21日（月）～27日（日）には下北沢「LA CAMERA ラカメラ」にて関連企画や映画『シュトルム・ウント・ドランクッ』メイキング映像上映等あり。

詳細はWebサイト（http://2013n16.tumblr.com/）まで

駅」下車、1番出口、徒歩5分）

◇講演会　午後2時～

講師＝池田浩士氏（京都大学名誉教授）

テーマ＝誰が、そして何が殺されたのか?―90年後の墓前に私たちの「歴史」と「いま」を考える

会場＝愛知産業労働センター（ウィンクあいち）　11F＝1104

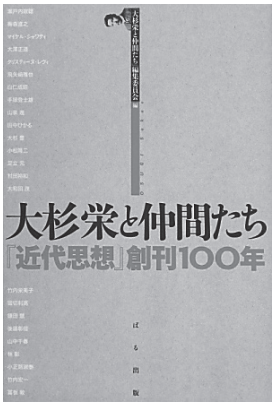
※名古屋市中村区名駅四丁目4－38

書籍案内

「大杉栄と仲間たち―『近代思想』創刊100年」（「大杉栄と仲間たち」編集委員会編）

「時代閉塞のなかで『近代思想』によって切り拓いたものは何であったかを問うことは、新しい社会像を模索する私たちに豊かな示唆をもたらすにちがいない」（本文より）

昨年10月に明治大学で開催された記念シンポジウム「大杉栄と仲間たち―『近代思想』創刊100年」の講演をベースに参加者たちが新たに加筆修正した論考などを収録した一冊。記念集会には参加しなかった瀬戸内寂聴らによる書き下ろし含む23篇と冨板敦編による「『近代思想』大杉栄セレクション／関係者年譜／関連日録」を収録。四六判・並製口絵4／336頁　定価2520円、ぱる出版より発売中。



【執筆陣】

瀬戸内寂聴、マイケル・シャワティ、大澤正道、クリスティーヌ・レヴィ、飛矢崎雅也、白仁成昭、手塚登士雄、山泉進、田中ひかる、大杉豊、小松隆二、足立元、村田裕和、大和田茂、竹内栄美子、堀切利高、鎌田慧、後藤彰信、山中千春、林彰、小正路淑泰、竹内宏一

イベント案内
国際シンポジウム「グローバル・アナーキズムの過去・現在・未来～世界とアジアをつなぐために」

日時＝2013年11月16日（土）10時～18時
場所＝明治大学駿河台キャンパス リバティータワー1083教室
報告者＝ガブリエル・クーン、飛矢崎雅也、栗原康、樋口拓郎、田中ひかる、
コメンテーター＝山中千春、仲田教人
主催＝関西アナーキズム研究会、共催＝グローバル・アナーキズム研究会、科学研究費挑戦的萌芽研究「口述資料データベース構築に基づく現代日本アナーキズム史に関する検討」（研究代表者＝田中ひかる）

開催趣旨

今日アナーキズム運動は欧米を中心に、中南米、東南アジア、中東、アフリカにおいて拡大し、それはグローバル・アナーキズムともいうべき様相を呈している。この現象は、新自由主義という単一の原理に基づくシステムに、地球上にいるあらゆる個人が、自らの意志に関わりなく巻き込まれ、支配されることに抵抗し、グローバルに連携することによって生み出されている。日本とアジアはこのような動向に結びつくのだろうか。日本におけるアナーキズムの過去を知ることは、このような現在と未来のアナーキズムを見据える上でどのような意味があるのか。ガブリエル・クーン氏をゲストに迎え、グローバル・アナーキズムの過去・現在・未来を見据えながら、世界とアジアが接続する可能性を問うのが、今回のシンポジウムの趣旨である。

ガブリエル・クーン氏プロフィール

1974年オーストリア生まれ。アナーキスト、活動家、著述家・翻訳家。著書は、甘糟智子訳『アナキストサッカーマニュアル』（現代企画社、2012年）ほか、資料集（ドイツ語・編著）『アメリカにおける「新しいアナーキズム」シアトル以降』（2008年）、論文集（ドイツ語）『多様性　運動　抵抗』（2009年）、世界各地のアナーキストへのインタビュー資料集（ドイツ語・共編著）『ジャカルタからヨハネスバーグまで　全世界のアナーキズム』（2010年）、海賊とアナーキズムについての著書（夜光社より近日翻訳刊行予定）『海賊黄金時代についての省察』（2010年）、ミュージシャンへのインタビュー資料集（英語・編著）『革命のために生きる　ハードコア・パンク、ストレイトエッジ、ラディカルポリティクス』（2010年）、（英語・編訳）『すべての権力を評議会に！　ドイツ革命ドキュメンタリー　1918～1919年』（2012年）など多数。

モントリオール・アナキスト・ブックフェア2013

樋口拓朗

モントリオールのアナキストブックフェアはサンフランシスコのものと並んで、世界でも最大規模のアナキストブックフェアといわれる。その規模を物語るのが、2013年5月25～26日に開催されたブックフェア以外に、5月1日のメーデー・デモを皮切りに、アナキストブックフェア関連イベントが一月に渡って目白押しになっていることだ。そのため、毎年5月のモントリオールは「アナキスト月間」の様相をおびることになる。2012年の2月に始まったケベックの学生ストライキも、5月にはブックフェアからの強力な後押しを受けていた。会場は、各種出版社のブース、アート展示、映画上映、ワークショップがそれぞれ英語とフランス語の通訳を介してプログラムされていた。文献センターとも交流の深いマギル大学のエイドリアン・ハーレーは、ブックフェアの託児と警察対応を担っており、多忙を極めながらも我々を深く迎え入れてくれた。ニューヨークからの高祖岩三郎、日本からの仲田教人、私を加えた3人で、'Anarchy and Apocalypse after Fukushima' を報告した。反応は素晴らしく、「15年以上ブックフェアを観てきたが、過去最高のワークショップだった」との声もあった。この報告内容は今後、日英の言語で何らかの媒体に発表される予定である。印象的だったのは、ブックフェアの併設イベントとして企画されていた、フランクリン・ロペス監督が編集したケベック学生ストライキの短編映画のペレミア上映会だ。学生ストライキの盛り上がりと共に創られた自律スペースで上映されたこともあり、闘争の直中にいた若い活動家達が30畳程度の広くない場所に200人以上詰め寄り、一つ一つの映像を回想しながら鑑賞し、最後にはバリケードの中で歌われていたというプロテストソングを合唱する熱狂的なエピローグを迎えていた。あの頃のモントリオールの熱気を疑似体感できた一幕であった。

新宿図書室所蔵文献目録（2）

著者名	タイトル名	共著者	発行所、場所	発行年月日
V. リチャーズ	スペイン革命の教えるもの	遠藤斌（訳）	創樹社	1979
C. メラ	スペイン革命の栄光と敗北 アナキスト将校の内戦と亡命と監獄	土谷洋子（訳）	三一書房	1982
H.M. エンツェンスベルガー	スペインの短い夏	野村修（訳）	晶文社	1973
喜安朗	革命的サンディカリズム		河出書房新社	1972
R. スカラピーノ	中国のアナキズム運動	丸山松幸（訳）	紀伊國屋書店	1970
絲屋寿雄	管野すが		岩波書店	1970
曹洞宗人権擁護推進本部編	仏種を植ゆる人 内山愚童の生涯と思想		曹洞宗宗務庁	2006
森長英三郎	内山愚童		論創社	1984
伊藤野枝	伊藤野枝全集 上		学芸書林	1970
伊藤野枝	伊藤野枝全集 下		学芸書林	1970
大沢正道	大杉栄研究		同成社	1968
大杉栄研究会 編	大杉栄書簡集		海燕書房	1974
安成二郎	無政府地獄		新泉社	1973
秋山清	大杉栄評伝		思想の科学社	1976
大沢正道　編	大杉栄選 無政府主義の哲学 I		現代思潮社	1971
大沢正道　編	大杉栄選 無政府主義の哲学 II		現代思潮社	1971
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 1 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 4 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 5 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 6 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 7 巻		現代思潮社	1963
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 8 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 9 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 10 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 11 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 12 巻		現代思潮社	1964
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 13 巻		現代思潮社	1965
大沢正道ほか　編	大杉栄全集 第 14 巻		現代思潮社	1965

【書評】古田大次郎『死の懺悔』『死刑囚の思い出』　「死の階段」廣川毅

没後八十五年 和田久太郎のはえあるとき

後藤優子

Ⅱ 彼・彼女らの〈知〉

私にとって高貴さとは、利害打算の完全な不在を意味する
マルグリット・ユルスナール

これは孤児の物語だ――神の似姿をした〈親〉は、彼・彼女らを「無限」に「抱擁」、するどころか生殺与奪の権利をふりかざし、〈子〉らのうえに君臨する。たまらずこどもは出奔した。そしてついに、不自由に生きるよりは自由に死ぬことを、よろこびとし逝くのだった。死の宣告を下した者こそ、ほかならぬ〈親〉である。だが、ほどなく恩赦をあたえ、己の威光をたかめようというもくろみに、〈子〉らのだれもがもはやしたがうはずもなかった。これは近代の〈家族〉の物語である、が、かかる生のシステムを未だ変革しえない共同体のうちで、悲劇は再生産されてはいないか。

和田久太郎の性格が多面的であったということは前回書いた。その原因のひとつと考えられるものに家族との関係がある。和田の母親は「おまえは一日も早く出世して親戚をみかえしておくれ」と、幼い彼に説ききかせ暮らした。強い母親と対照的に、富裕な家にうまれながら放蕩して財産を使いはたした父親は、月給七、八円で「漸く一家をささゆ」という状態で、浄瑠璃をうなることを唯一の楽しみとし、存在感が稀薄であった。彼は、互いに再縁の母が四十歳、父が五十四歳のときのこどもである。「學校が退けてから、そつと學校の運動場の塵捨て場へ行つて、鼻緒の切れた草履を拾つて歸り歸り」せねばならないほど家庭は窮乏していたが、一方で、彼はイエ的な束縛から比較的自由であった。『へちまの花』を読み社会主義に接近した和田は、愛知新聞主筆の横田淙治郎から諸先輩に対する紹介状をもらうと、「勇んで上京」する。

だが、そのような和田に対し、『新社会』誌上で「某社会主義者は、養うべき責任のある両親を振り捨てて都会に出、社会主義の宣伝に従事しているが、無産者にあっては、都会に住んでも田舎に住んでもいずれ終日働かなければならないのだから、田舎にいて親を慰めながら、主義の宣伝をしたらどうか」という同志からの批判が出る。すかさず彼は反論した。

――僕は孝子になる為に、自分の感情をまげられない。君の道徳では當然かも知れぬが、僕の感情は嫌やだと叫ぶのだ。勿論僕だつて親の愛情を感じなかつた筈はない然しその愛情をさへ滅茶苦茶にぶつ潰した、あるものがあるのだ。そのあるものに對する感情はどうするのだ。如何にも僕の兩親は今老衰と飢とに襲はれてゐるだらう、いや或は既に餓死したかも知れず、ぶらんこ往生をとげたかも知れない……

それがどうしたといふんだ！だからお前も故郷へ歸つて共々餓死しろといふのか。

君は親が子に對する愛情にも、肉親とかいふ如き同情らしき涙にも、今の世の中の必然が作つた、あの恐ろしい、冷めたい、残忍性がどれほど含まれているかを知つてゐるか……知つてゐるか……僕はしみじみ知つてゐるんだ。だから同じ餓死をするにしても、兄弟（放浪者）の群で餓死する方が却つて心地好いと思つてゐるのだ――

和田は、最後まで親との関係を完全には切りすてなかったが、人間同士の出会いを妨げる蠱惑的な大文字の〈家族〉に取りこまれてしまうこともなかった。それゆえ、のちに同志たちと「出入り」が自由な親密圏をきずきえたのである。

一方、関東大震災発生時に朴烈とともに保護検束され、二年後に大逆罪を適用される金子文子は、父から籍に入れてもらえなかったばかりでなく、心身両面への虐待を受けて育つ。母は、彼女の実父と別れたのち、おさない文子を遊郭に売ろうとした。さらに養女として送られた朝鮮では、祖母から壮絶ないじめに遭うが、食事もあたえられず外に出されていたとき「うちでごはんを召しあがりませんか」と声をかけてくれたのは近所の朝鮮人の女性であった。訊問のなかで文子は「どうか私に父

母の愛を解剖させてください」とうったえる。彼女には「親族関係を中心として虚無思想を抱くようになった」という明確な自覚があった。みおとしてはならないのは、しかし、文子が終生憎悪の焔をたぎらせていたのではないことだ。彼女はいう「私は父を母を恨みません」。

つまり私は本当の親の愛を知らず、親を知らないということになります。親を知らないということは私が親と思っている人が、実は親でないということになりますから、私には孝行とか奉仕とかいう感激が起りません。

屏息しかけた大正最後のアナーキーな光を継いだ難波大助も、父との葛藤を経て、神の似姿をした〈父〉へとステッキ銃をむける。実父は郷土の名士であった。家族に対して暴君のようにふるまう父が衆議院議員に当選したとき、難波のなかで決定的な反感が根をおろす。維新時に功績をあげ没後に正五位を贈られた曾祖父をもち、地元では「大旦様」と呼ばれる難波は、普通選挙運動に関心をひかれ、東京で不慣れな労働者の生活に飛びこんでいく。ある日、友人に案内されていった「淫売窟」で、娼婦らの「どん底」生活を目のあたりにしたとき、彼のなかでめざめていくものがあった。

――女ト云フモノニ対シテハ実ニ軽蔑スヘキ人間テアルト許リ考ヘテ居ツタ思想カ少シ変ハリ且人間ト言フモノハ愈々徹底シタラ什ンナ事テモ出来ルト云フ事ヲ感シマシタ其徹底ト云フ事カ淫売窟ヘ這入ツテカラ非常ニ心ヲ動カサレタノテアリマス

（第三回尋問調書）

難波も、和田や金子のように血縁関係の不条理にもがきながら、死を前にしてそれを乗りこえたかにみえる。遺書のなかで彼は父に語りかける。

×あなたの今の態は何ですか！

精神に異常を呈する程衰弱しておる。――世間の頑迷輩はこれを聞いて益々感心するであろう。（あの人は良心の鋭い高潔な人だ）と。然し困るのは誰です。迷惑するのは誰です。私は今あなたが昔息子共を大声にて叱咤されし時の様な元気潑剌たる状態にかえることを要求します。

あなたのせられることは親族等の馬鹿者共の口車に乗って、祖先の名誉のためとか世間への遠慮とかのために、私という生きた遺骨を戸籍から除くという様な形式的のことではなく――生きた人間をより幸福にさすために努力することです。

勉学への志をつよく有しながら進学をはばまれたのちも、和田、文子は熱心に独学をつづける。だが、やがて両者にとっては経験「知」が上まわっていくであろう。難波にいたっては、高等学校に入学後「学校生活で得るものはない」と早々に自主退学している。三人に共通するのは権威的な「学知」からの解放だ。それはひとを平均「知」に繋ごうともくろむ。しかし、彼・彼女らは、己の経験を通じ自律して在ろうとした。地方にいるときからあこがれ接近した堺の売文社を去るときの和田のことば「文學の事にのみ恥る恥かしさを感じ――」は象徴的である。

よく似た者はすくなからず存在したであろう。しかし、和田、文子、難波が異なったのは、〈血〉を通じての「虚無」を、深奥に刻んでいたことではないか。覚醒する常態。かくて彼・彼女らは〈知〉る人間となった。そして、その〈知〉は、共同体のウチでのみ超越的な価値、を撃ったのである。

照る程に蔭濃く造る××よ我は光を讃むる能はず　　文子

これは遺棄された王子・王女たちの、王への叛逆――いかで大逆と名指すべき――の物語なのだ。〈親〉となり物語を反復することなく足早に立ち去った彼・彼女らのいた場所は、今もほの明るんでいる。

アナキズム文献センター通信第24号
発行／2013年9月1日
発行所／アナキズム文献センター
編集／運営委員会
連絡先／東京都新宿区新宿1－30－12－302
郵便振替口座／00850－3－30010
口座名　A文献センター
Eメール／info@cira-japana.net
定価／一部100円